

石吉岩氏のコメントに対する回答

宣 方
(中国 人民大学)

石吉岩教授が拙稿に対して詳細な回答をしていただいたことに心から感謝します。私はシンポジウムの一日前になって、ようやく石吉岩教授のコメントを受け取ったので、十分に準備する暇がなく、簡単なお答えしかできませんことをお詫び申し上げます。

石教授は、簡潔に拙稿の要旨をまとめた上で、先ず、次のような疑問を提起しておられる。

第一に、もし論者の主張が成り立つなら、大乘仏教が東南アジアに流入したのは非常に早い時期に遡るはずである。しかし、よく知られているように、七世紀の末に当地を訪れた義浄は、『南海寄帰内法伝』において、この地域の仏教の大部分は小乗仏教であると述べている（大正蔵 54, 205 b）。一般論として言えば、大乘仏教を中心として始まった仏教が急速に小乗化するという可能性は高くない。

仏教史一般からいえば、確かに評者の言うように、「大乘仏教を中心として始まった仏教が急速に小乗化するという可能性は高くない」と言えるかもしれない。しかし、筆者の考えでは、少なくとも次の三点に注意する必要があると思う。

第一の点。義浄の文章を子細に検討すると、この地域に大乘仏教があったという可能性を完全には排除できないことに気づく。議論の便のために、『南海寄帰内法伝』巻一の関連する記述を引くと以下のごとくである。

然南海諸州有十餘国。純唯根本有部、正量時欽。近日已来、少兼餘二。斯乃咸遵佛法。多是小乘。唯末羅游少有大乘耳。

南海諸国の仏教の大部分は小乗仏教であるという点は石教授の認識と完全に一致している。しかし、私が言いたいのは、ここに、この地域の「多

くが小乗で」(多是小乗)、大乘仏教はわずかに「末羅游」に見られる程度だと書かれていることは確かであるが、その他の地域に大乘仏教が細々と存在していた可能性を完全に否定するものではないということである。義浄は、この後のところで「北インドや南海地方は、皆な小乗である」(北天南海之郡、純是小乗)と書いてさえいるが、それでも、末羅游の例がある以上、私は前の記述の方が正確であると考えている。しかし、最も重要なのはこの点ではない。結局のところ、それが示しているのは、たかだか七世紀最後の三十年間の南海諸国の様子に過ぎないからである。

第二の点。もっと重要なのは、義浄が我々に次のように報告しているという点である。

其四部之中、大乘小乗区分不定。北天南海之郡、純是小乗。神州赤崙之郷、意存大教。自餘諸処大小雜行。考其致也、則律檢不殊、齊制五篇、通修四諦。若礼菩薩、誦大乘經、名之為大。不行斯事、号之為小。(大正藏 54、205 c)

これによって、南海諸国にあつては、大乘と小乗はそれほど異ならず、両者が緊張関係にあつたわけでもなく、大乘經典を誦読するかどうか、菩薩を礼拝するかどうかにあつたことが知られる。

第三の点。更に重要なことは、大乘と小乗の緊張関係は、大乘經典の中で意図的に作り出されたもので、そこには誇張があるという点である。北伝仏教は、基本的に、この種の大乗・小乗の觀念を全面的に受け入れた。しかし、上の義浄の「四部之中、大乘小乗区分不定」という記述、ならびに、ハインツ・ベツヒェルト (Heinz Bechert)、王邦維等の学者の研究によって、大乘仏教と、いわゆる小乗仏教の間関係は、大乘經典が力説するような緊張したものではなかったことが明らかになっている。更に言えば、私個人は、グレゴリー・ショペン (Gregory Schopen) の見方、つまり、大乘は部派にまたがる運動であり、六世紀以前のインドにあつては、その影響力は、実際には、主流を占めた部派仏教を超えることはなかったという考え方を受け入れたいと思っている。

更に石教授は、婉曲に次のように指摘している。

論文の中で、求那跋摩は法蔵部の僧侶であろうと言っている。ならば、

法蔵部系統の仏教が流入した可能性を研究の中心に据える方がよいのではないか。

研究対象の求那跋摩についてだけ言えば、これは疑いなく正しい見解である。もし我々の研究目的が南海諸国と上座部仏教の関係について抱かれている紋切り型な印象を修正するところにあるなら、これは確かにそれにふさわしい方法である。ついでに言うなら、チャールズ・ウィレメン（Charles Willeman）教授の南海諸国の化地部に関する研究も我々の理解を正す助けとなろう。

しかし、拙稿の当初の目的は、ポロブドゥール仏教の起源を論ずるための準備にあったので、これらの資料に含まれる要素の中で大乘仏教の可能性のあるものを最優先にしたのである。

石教授は、更に、次のような疑問を提起しておられる。

もし論者の見解の通りだとすれば、その他に小乗仏教に転換したことを示す資料はあるのであろうか。

コメントの文脈からすると、表現は穏やかではあるが、非常に厳しい詰問と言える。しかし、私が拙稿の中で言おうとしたのは、たかだか次のようなことに過ぎないのである——仏教がこの地域に流入し始めた頃は、大乘・小乗のいろいろな要素が混じっていたかもしれず、主要人物や信者の欲求の変化に伴って重点が移動しただけで、はっきりとした転換、あるいは急激な転換が必ずしもあったわけではない——。もちろん、これは推測に過ぎないのであるが。

石教授がコメントで指摘しているもう一つの問題は次の点である。

一方、インドネシアのスラウェシ（Sulawesi）から出土した青銅製の飲光仏（燃灯仏）像は四世紀の作と考えられるが、この像から見て、求那跋摩以前に、この一帯には本生譚が流布していたと言えるのではなからうか。論者の見解をお尋ねしたい。

石教授のご指摘に感謝したい。実際、この仏像はインドネシアの仏教史の起点に位置するものであり、ほとんど全てのインドネシア文化史、宗教史の教科書に書かれており、ジャワの仏教資料を集め始めた当初から注目

しているものである。

しかし、この定光仏には光背がなく、浮き彫りの技法と服飾から見て、典型的なアーンドラ地方のアマラヴァティ (Amaravathi) の様式を備えており、東南インド的である。これは西北インドのガンダーラの定光仏の造像とは異なる。更に、外国の商人が齎した舶載品だとする学者も多い。従って、これによって本生譚がこの地方に根を下ろしていたと考えてよいか疑問である。

南アジアの宗教を研究する学者たちの中では、定光仏が船乗りの守護神として崇拝されていたという認識が一般化している。私もそれに同意するし、そうした事情はかつての南中国においても同様であったと考えている。私の考えでは、仏教が海路で伝播し始めた当初に、この仏像は南海諸国に伝えられたが、それと然灯仏授記の本生譚との関係は決して緊密ではないのである。本拙稿は、もともと南アジア仏教の研究者と意見交換することを目的に書いたものであるから、定光仏と西北インドの仏教との関係を意図的に強調した面がある。

こうしたわけで、この点は拙稿の論旨と直接的に関わるわけではないし、それを本文中に加えれば、もともと雑駁な論文が更に雑駁でわかりにくいものになりかねないと考えた。そこで意図的に言及を避けたのである。しかし、今、石教授のコメントを受けて、注を加えて説明すべきであったと反省している。

石教授はコメントの中で次のように指摘している。

第二に、第一の問題と関連することであるが、論者は、求那跋摩の伝記に出てくる『華嚴経』、菩薩地、禅観修行、呪文、本生譚などの要素から判断すると、求那跋摩が活動した初期のジャワ仏教にも、ボロブドゥールの寺院跡に見いだせるこれらの文化的要素があったかも知れないと論じている。しかし、祇洹寺で『法華経』と『十地論』を講義し、慧義に請われて『菩薩善戒経』を刊行したなどの事跡は始興で行われたものである。これらは求那跋摩の学問傾向の特徴を部分的には示しているが、中国の仏教界の要求に応えるためであった可能性もある。従って、禅観修行、呪文、本生譚以外を初期のジャワ仏教にあったとするのは妥当ではないと思われる。これについての論者の考えを伺いたい。

これは極めて妥当な見解である。ただここで述べさせていただきたいのは、私は、何も初期のジャワ仏教にこれらの要素があったと断定しようとしているわけではなく、従来の研究がこれらの要素を完全に排除していることが正しいかどうかという点に注意を促したにすぎないということである。数学上の概念を使わせてもらうなら、これらの要素が答えの「値域」(range) の内に含まれうるということを指摘しているだけで、これが答えだと断言しているわけでは全くないのである。

現存する資料から言えば、『華嚴経』と初期のジャワ仏教を関係づけるのは確かに強引であろう。石教授は華嚴学の専門家であり、その見解をそのまま受け入れたい。ただ、『華嚴経』と南海諸国の仏教の関係について、もう少し補足を行い、石教授のご叱正を賜りたいと思う——『華嚴経』の成立と関係が深いオリッサ (Orissa) は、非常に早い時期から南海諸国との往来が盛んであった。求那跋摩以前に中国に来て『華嚴経』を翻訳した仏陀跋陀羅は、南海諸国と盛んに交易を行っていた国の出身であったし、その翻訳に与った法顕と南海仏教との緊密な関係は言うまでもないことである。求那跋摩より数年遅れて、同様に海路から中国に入った求那跋陀羅も『華嚴経』を講義した。従って、『華嚴経』が非常に早くに南海諸国に伝わった可能性を完全には排除できないのではないだろうか。

最後にもう一度、石教授のコメントと指摘に対して感謝の意を表したい。拙稿の内容を深く理解し、今後、私がこの方面の思考を深めるのに非常に役だっただけでなく、穏やかでありながら、自身の立場を貫くコメントを読んで、心から感服し、「文をもって友に会う」ことの快感を味わった。指導する学生たちに学習上の手本として推薦したゆえんである。石教授には今後も引き続きご教示をお願いしたい。

(翻訳担当：伊吹 敦)